

人間伊達には歳はとらない。世に青二才という言葉がある。インドネシア語に “Akal singkat, pendapat kurang.” (思慮がたらないと得る物は少ない)とか “Panjat bersengkelit.” (滑り止めの綱を巻いて木登りする = 経験が浅い) という表現がある。

また、同じ人生経験の多寡をいう表現はインドネシアにも有るんですね、たくさん、似たような表現が。 “Sudah banyak makan kerak.” “Sudah biasa makan emping.” “Sudah biasa makan nasi.” といずれも、それぞれ、ご飯のおこげ、ウンピン、飯をたくさんたべていると経験の長さを主張している。

また、文字通り「酸いも甘いも噛み分けた」という言い方も有る。 “Sudah cukup asam garam.” とか “Sudah cukup garam penghidupan.” と塩の辛さを人生の経験に例えている。 “Belum tahu di pedas lada,” と胡椒を持ってきているのもあり、いかにもインドネシアらしい。

よくあること、しまった！ と後悔先に立たず、後の祭り、英語ではチャンスは前髪を掴めというが、 “Nasi sudah menjadi bubur.” (古くなった飯であろうか、もうお粥にしてしまった = 覆水盆に帰らず) “Cekak henti, silat terkenang.” (喧嘩が終わった後で拳法を思い出す = 後で思いついても役に立たぬ) “Hari baik dibuang-buang, hari buruk dikejar-kejar.” “Hari pagi dibuang-buang, hari petang dikejar-kejar (いい時は捨て置き、悪くなってから追いかける = チャンスがなくなってから追いかける)。人生で真によく起こることであるが、これに関してインドネシアでは面白い表現がある。曰く “Malang tak berbau.” (不運は臭わない = 不運は事前に知ることが出来ない) と。

「におう」は日常よく使われる。特に悪事がらみで。秘密や悪事が洩れ始めることを “Sudah tercium baunya.” という。悪事が匂うくらいだか

ら、脂粉の「香り」なんて嗅ぐまでもなく一発ではれてしまう。

「におい」といえば、ドリアンに触れないわけにはいかない。ドリアンは「臭い bau」か「匂い merbak, harum」か。断言するのは不可能なのでどちらでもいいが、「臭い」の人は人生の幸せの1つを知らないことだし、「匂い」の人は1つだけ幸せが多い幸せ者である。

多くの日本人観光客はドリアンを酷評しているが、幸せが1つ少ないことになる。放っとけばいいものをどうしてもドリアンに馴染めない人にはいつもとにかく3回トライしてみて下さいとお節介をやっている。

ドリアンがでたついでに “Dapat durian runtuh.” (落ちてきたドリアンを拾う) というのは「労せずして益を得る」即ち「濡れ手で粟」の意味になる。話は元に戻って、同じく匂いに harum という言葉がある。 “Harum Manis” (甘い香り) といえばインドネシアの大きな緑色のマンゴーである。マンゴーと言わなくても harum manis で通用することとは花の世界の香り “merbak” の王者 “melati” ジャスミンに比肩すべき果物であるということか。

花には蜜蜂が集まってくる。 “Dimana bunga berkembang, disana kumbang banyak datang.” (花が咲けば蜜蜂がたくさん飛んでくる) これは人間界でも同じ。上の諺は「美人の周りには男が群れて来る」という意味である。

インドネシアの歌 “Mawar Berduri” (バラには刺がある) には “banyaklah kumbang datang ingin menghisap madunya, aduh sayang, banyak kumbang yang mati karena tertusuk duri, aduh sayang ... (たくさん蜜蜂が蜜を吸いに集まる、アー、可哀相に刺に刺されてたくさん死んでいく、アー、可哀相...) と歌われている。そういえば、死にこそしなかったが随分痛かったな... (W)